

東京オリンピック直前

輸送前の準備

東京オリンピック馬場馬術競技が行われたのは2021年7月24日～28日。本番に至るまでの準備、トレーニング、輸送等について紹介します。Ludwig が1位で代表選考を通過し、Barolo は2位で予備馬となったので、この2頭を輸出前検疫に連れて行くことになりました。検疫は7月6日～13日にドイツ・アーヘンの CHIO Aachen が開催される競技場で行われました。ヨーロッパから日本に輸送される馬場馬術競技馬はすべてここで検疫されました。

検疫に入る前までに人馬ともに多くの検査や手続きがありました。日本へ輸送するすべての馬具と飼料（乾草を除く）のパッキングリストの作成と提出、ピロ・伝貧・馬インフルエンザそれぞれの検査を別日に行い検査結果提出、フライトグループ（馬と一緒に飛行機に乗って世話をするグループ）の個人情報や犯罪記録の提出、輸送前10日間の体温測定とヘルスペーパーの提出、そして人はアーヘンへ入厩する前のコロナテスト、日本入国の96時間前と72時間前の2回のコロナテストと陰性証明の作成など、簡単に挙げただけでもこの量の手続きが必要でした。これ以外にも細かい準備が多くあり、6月の選考会を終えてからアーヘンを出発するまでは、馬に乗ることよりも手続きに多くの時間を費やしました。特にコロナの影響により大会組織委員会の対応が遅く、手続きも煩雑で過去の大会と比べても求められることが非常に多かったようです。

検疫施設内でのトレーニング

アーヘンの検疫施設で1週間以上を過ごすので、ここでのトレーニング、コンディショニングは重要です。2頭とも無事に検疫施設に入厩することができましたが、Barolo は6月の選考会後はあまり調子が良くなく、自厩舎でのトレーニングでは、騎乗して馬場に入ると途端に動きが重くなり、全く運動する気になくなるような状態でした。しかし、時間をかけて常歩をして少しずつ脚の扶助を受け入れさせていくと、動きはシャープになって普段通り動けたり、外乗に行くに驚くほどフレッシュに暴れまわったりするので、理由は「トレーニングが嫌だ」と考えているようにしか感じられませんでした。それでもトレーナーの Imke は何かがおかしいはずだと考え、血液検査や獣医師の診断を仰ぎましたが特別悪いところは見つかりませんでした。ただ、本調子でないことは間違いないので、必要以上のトレーニングはせずに、馬の状態と相談しながら馬を短くまとめておくだけのトレーニングに留めました。アーヘンでも同様の状態でしたが、馬房

での振る舞いや騎乗スタート時の状態は自厩舎よりも良く、運動した状態も選考会の時よりも良かったため、こちらの馬でも東京へ行けそうだという感触を得られ、予備馬としてしっかり準備を整えることができました。

Ludwig は引き続き好調でした。アーヘンに入厩してからは競技モードになり馬がホットになるかと考えていましたが、最初の3日ほどは通常通りでむしろおとなしいほどでした。その後、徐々にトレーニングを続けていくにつれて動きにキレが出てきて、競技に向けて順調に仕上がっていると感じました。

輸送日前は疲れが残らないように軽めの運動のみとしておきたかったことから、7月7日～10日でしっかりとトレーニングをして、11日、12日は軽めの運動でリカバーさせて13日に輸送というスケジュールを組みました。トレーニングでは10日に経路練習をするためにグランプリの経路の内容を確認していきました。気になる部分があった運動項目は念入りに調整しつつ、どの運動もどのような状態を作って行わなければならないか、騎乗前にしっかりとイメージして取り組めたため良い調整ができました。しかし、経路練習になるとそれが同じように繋がらないものです。それを今までの経験で学んでいたので、経路練習で人馬ともにどのようなミスをするか確認することにしました。その結果、選考会まで積みあげてきていた約束事を馬が少し忘れていたように感じました。特に入場・停止ではすぐに動こうとしました。伸長速歩では前へ行こうという気持ちが7割くらいで十分な伸展がありませんでした。また、1回目のピアッフェはスポットで行うには十分スルーしていませんでした。最後の中央線も同様です。前半のパスサージュは良いけれど、ピアッフェと後半のパスサージュは十分な前進氣勢とスルーネスが足りなくなる傾向になりますが、まさにその症状が出ていました。ただし、その改善方法は十分にこれまでのトレーニングで繰り返してきたので、本番までの宿題としてどのようなトレーニングを行うかを確認することができました。駈歩区間はミスする気配もなく、パスサージュも数カ月前より非常に良くなっていたので、この時点での仕上がりとしては上々であると感じることができました。

アーヘン会場は毎年 CHIO Aachen という大規模な競技会

を開催しているところで、施設・設備が整っています。輸送会社のピーデンが取り仕切って、運動時間のスケジュールリングや選手やグループの食事の手配、馬具や飼料の輸送手配などを行なってくれました。競技とは違ったマネジメントでしたが、入厩時の混雑など以外はスムーズでした。運動は競技用ドレッサージュアリーナ、屋外アリーナ、インドアアリーナ、グラスアリーナが使えるようになっており、満足のいく環境でトレーニング



▲輸送のためにパッキングした飼料

を行うことができました。特に競技用アリーナで騎乗できるチャンスは競技に出場する以外ではないため、観客席に囲まれたスタジアムでトレーニングできる貴重な機会となりました。また、グラスアリーナでの散歩やグレージングも馬のリフレッシュに役立てることができました。

日本への輸送

アーヘンでの最終日は、馬の輸送とは別に鞍箱や飼料などの荷物の輸送も行われました。馬が出発する数時間前には全ての鞍箱とラッピングしてパレットの上に用意した飼料を準備し、輸送会社のピーデンに持って行ってもらいます。そして、その後馬たちは出発空港のリエージュ（ベルギー）に向けて、何台もの馬運車で大移動していきました。アーヘンで馬を見送った私たちは、先に日本に移動して、東京オリンピックの会場である馬事公苑で彼らを待つこととなります。順調に調整ができた Ludwig が日本に向かい、Barolo は自厩舎に戻りました。

リエージュを飛び立った飛行機はドバイで燃料を補給したため、馬たちは約30時間もの間、飛行機に留まっていなければなりません。長いフライトでしたが、馬たちは無事に東京に到着して馬事公苑に入厩することができました。フライトグループは各チーム1名のみが認められています。日本チームは私のグループを務めてくれたハンナがその任にあたり、代表馬3頭とリザーブ馬1頭の世話をしてくれました。機内ではグループも長時間寝ることはできず、馬の様子をある程度の間隔で時間をおいて確認しなければなりません。もちろん餌や水や水を吊るすことはできないので、人の手で餌や水を与えなければなりません。長時間にわたって、オリンピックに出場する馬たちができる限りストレスを感じないで輸送を終えられるように、気を使って責任を持って業務にあたってくれました。4頭の様子をしっかりと見て、各グループに報告する彼女の働きを見てとても誇りに感じました。

馬事公苑会場に入厩

7月15日の早朝に馬事公苑に入厩してから競技開始日までは9日間ありました。競技が始まる24日から逆算し、輸送の疲れからの回復の時間、競技へ向けてのトレーニングのバランスを考えて運動スケジュールを組み立てました。入厩から3日目には体温が38.8度前後まで（平温は37.9度ほど）上がることがありましたが、何度も冷水をかけて体を冷やすように対処したところ1日で体温は下がりました。獣医師によると輸送からくる熱ではないかとのことだったので、大きな心配はしていませんでしたが、馬によっては長距離輸送の疲労から蹄葉炎になる馬もいるようなので、何も問題がなくて本当に良かったです。日本チームの他の馬も熱発したり、傷腫れを起こしたりということがありました。長距離輸送による競技会はこれまでに何度か経験がありますが、自分の馬にも周りの馬にもこのような熱発やそれに伴う疾病が起きたところにはほとんど遭遇しなかったため、改めて長距離輸送による影響の怖さを感じました。

Ludwig は3日ほどかけて徐々に運動量を増やしていくように

して、体力の回復と通常のトレーニングへの準備に努めました。18日にはトレーナーの Imke も到着し、19日からトレーニングを開始しました。トレーニング開始時は馬の状態は良いものの、競技に必要な収縮体勢と比べると8割程度の出来でした。そこでトレーナーと話し合い、翌日には少し馬と戦ってもかまわないので、小さな脚扶助に馬を反応させるようにして、しっかりとスルーさせて競技に必要な収縮体勢を作るようにしました。脚へのシャープさは十分満足のいくものではありませんでしたが、翌日以降に繋がる調整ができた手応えがありました。そしてその目論見通り、次の日には想像通り良くなっていました。この日は少し軽めの運動のみでしたが、収縮を求めた速歩運動を行いました。速歩を始めて10分もすれば、しっかりと収縮状態を作ることができ、パッサージュへいつでも移行できるような状態でした。この日は FOP (=Field of Play / 競技アリーナ) でのファミリアリゼーション（馴致）でしたが、馬は物見を一切せず普段通りの精神状態でした。

このように調整を行なってきて、最終調整に入っていくのですが、ここで一つの問題がありました。それは、今回のオリンピックから導入された出場順の決定方法により、出場日が24日と25日のどちらになるかわからないということでした。従来は国（チーム）の出場順を決める抽選があり、チーム内の出場順は各監督が決めていたので、数日前にはどの日に出場することになるのかわかっていました。しかし今回はすべての出場人馬を FEI ランキング順に並べ、その順番に沿って事前に決められたグループに振り分けられる方式でした。一見、自分のランキングがわかっているれば出場順はわかるように思えますが、インスペクションが終わるまで出場馬が確定せず、また、急にリザーブ馬が出場する可能性もあり、1頭棄権や交代があれば出場日がずれてしまいます。出番が競技前日までわからないという状況については、各国選手から改善を要望する声が挙げられました。

このように、出場日に向けて調整することが非常に難しくなりましたが、それはどの馬も同じなので、自分の馬をしっかり仕上げることに集中して取り組みました。競技前の2日間は経路の運動項目をトレーニングし、特にアーヘンで起きたミスをしっかりと修正するようにしました。また、速歩のハーフパスなどは、その時の馬の状態に合わせた調整もできて、競技に受けて非常に良い状態に準備が整いました。



▲馬事公苑会場でのトレーニング風景